小中野小

自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成

（３年計画の１年次）
校長　花生　典幸

１　研究主題について

これまで本校では、道徳の授業を中心に「対話する場面」、「お互いの考えを聞き合う場」、「自分の考えを振り返る場」を設定し、２年間研究を進めてきた。また、学校生活全体で「話す・聞く系統表」を生かした指導を継続してきた。それにより、相手の気持ちを深く理解し、進んで自分の思いや考えを分かりやすく相手に伝えようとする児童が増え、話す・聞くスキルが身についてきた児童も見られるようになってきた等の成果を確認することができた。しかし、全体的に見ると、自分の考えを進んで発表する意欲がもてなかったり、伝えたい考えや意欲はあるが、相手に対して、分かりやすく自分の考えを伝えたりすることができない児童の割合が依然として多いことが分かった。

そこで、今年度は、研究テーマはそのままで、国語科と算数科に研究教科を広げることとした。そして、昨年度までの研究の成果を生かしながら、「対話する場面」をただ設定するのではなく、「発問」を精選したり、「教材へのしかけ」を工夫したり、「教材提示・板書」の工夫をしたりすることにより、児童が必要感をもって対話に臨めるように促していきたいと考え研究に取り組むこととした。また、子どもが主体的に発言しようとする姿勢が見えた際には積極的にほめることで、学習意欲を喚起していくことにつなげていくことも確認した。以上のようなことをもとに、自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成に努めていきたい。

２　研究のねらい

自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育成するための効果的な指導のあり方を、国語科と算数科の学習における授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

授業の中に「対話する場面」を意図的に設定し、対話のさせ方を工夫することにより、自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育てることができる。

４　研究内容

(1)　「対話をする場面」の工夫
　ア　発問の工夫
　イ　教材へのしかけ
　ウ　教材提示の工夫
　エ　板書の工夫
　オ　問い返しの工夫
(2)　「話す・聞く」系統表を生かした指導、評価の工夫
　評価・改善案を次の授業に生かす。
(3)　「自らを振り返る活動の設定」の工夫
　ア　振り返させる手段の工夫
　イ　振り返させる方法の工夫
　ウ　児童の変容を広げる工夫
(4)　学級の支持的風土の育成

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	研修内容・学年・授業者等
９	２	第１回授業研究（６学年）授業者　教諭　佐々木　亮輔 算数「式のよみ方」
１０	２１	第２回授業研究（１学年）授業者　教諭　類家　志乃 国語「じどう車くらべ」
１１	１１	第３回授業研究（４学年）授業者　教諭　小杉　宙裕 国語「ごんぎつね」

(2) 一般研修

月	日	研修内容・講師・概要等
６	１８	「一人一台端末の活用」について 講師：八戸市総合教育センター 主任指導主事　石井　一二三
６	２３	「のびゆくちぐさの子」を活用しての児童理解の研修
８	２５	青森県学習状況調査採点と分析
１２	２２	総合的な学習の時間の単元構成計画の見直し①
１	１９	総合的な学習の時間の単元構成計画の見直し②

６　研究の成果

(1) 対話する場面を意図的に設定し、対話のさせ方を工夫したことにより、子ども同士の対話スキルに向上が見られた。また、教師が子ども同士の対話をファシリテートすることにより、児童同士の関わりが増え、子ども主体の授業が多くみられるようになった。

(2) 対話を意識させて授業を継続したことにより、相手の話に真剣に耳を傾け、相手を理解しようとする意識が育ってきた。

７　研究の課題

(1) 問題意識をもち、その問題に向かって解決するための意味のある対話ではなく、ただの意見交流で終わってしまうことが少なからずあった。授業の中で対話させる場面(課題設定の工夫が必要)をはっきりとさせ、どこで、どのように、何のために行わせるのかを吟味して対話を設定していく必要がある。

(2) 子ども同士の対話を促す際に、教師の発問が適切でないため、活発な対話にならなかったり、課題解決に至るような深い話し合いが実現できなかったりした。どんな発問をすればよいか、また、対話をより効果的なものにするために、課題をどう設定すればよいか等の吟味が必要である。

(記入者　佐々木　亮輔)